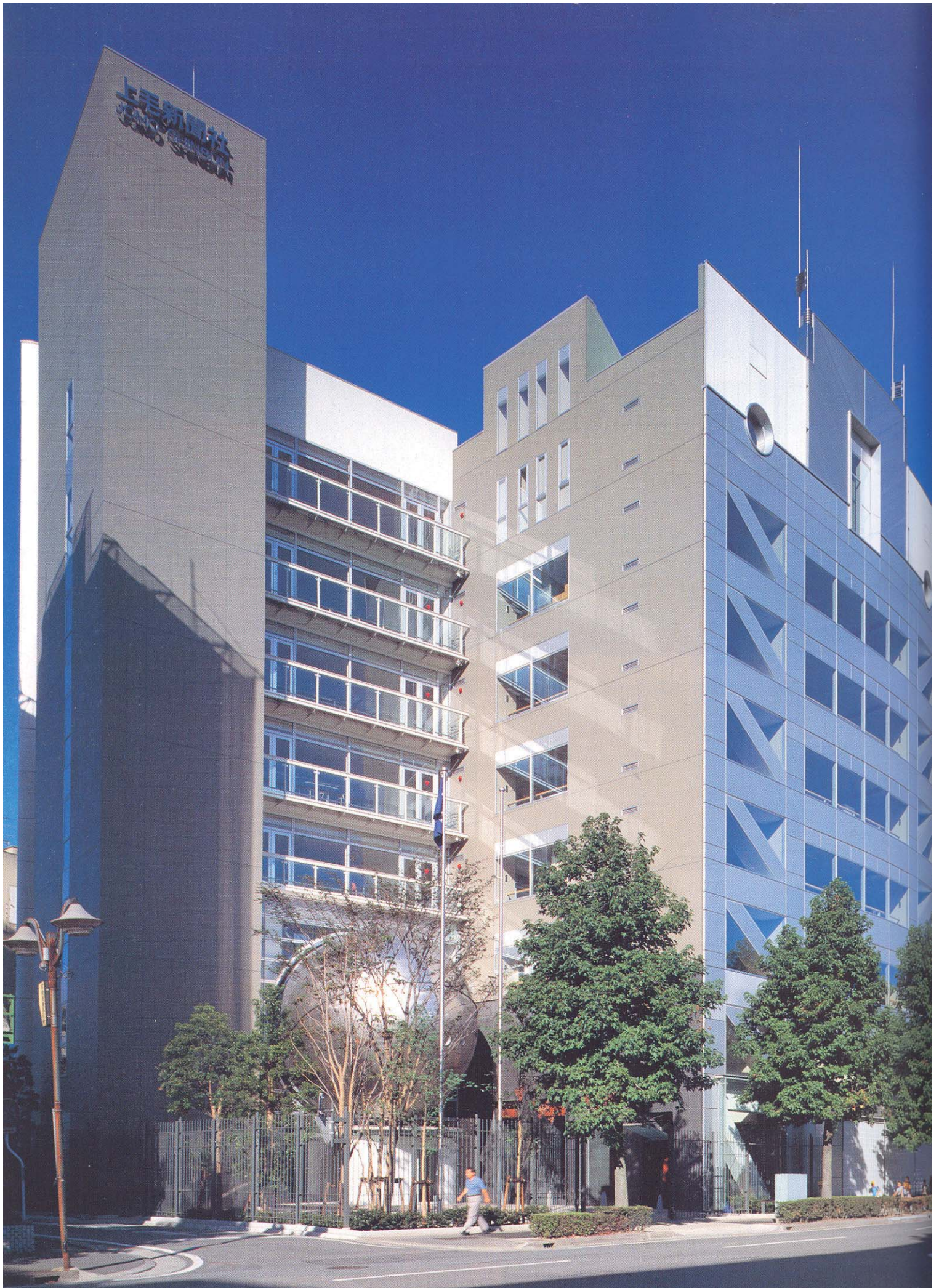


新建築

SHINKENCHIKU:1997

5





上毛新聞社
群馬県庁舎

街をつくる建築

柴田知彦

誰もが考える当たり前の事柄であるが、ここに紹介する上毛新聞社のふたつの事務所建築は、いずれもその街とどうあろうとするかがテーマとなっている。幾分の気恥ずかしさをもっていえば、本社は品格ある街角を、支社は潤いある街角をつくることを目指している。

上毛新聞本社

JR 新前橋駅前通りは20年ほど前に土地区画整理事業により開かれ、この街の中心軸をなしている。まだ整備途上にあるとはいえ、両側に美しいアメリカ風の並木と樺の中央分離帯が配置された格調ある通りで、この街の表の顔となっている。県内の二大都市、前橋と高崎の中心に位置するこの新しい街は、これら都市連合を業務文化両面においてつなぐ役割を期待されてもいる。上毛新聞社は、わが国の新聞界でも有数の歴史をもち、創業は明治20年に遡る。本社および輪転機工場がこの地に設置されたのが昭和39年なので、すでに30年余を経て、この会社自体の発展と時代の変化により、機能と質の両面において更新拡張の必要が生じていた。それに伴い、数年の企画時期を経て現在の駅前通りに面したビルが実現するに至ったのだが、その間将来の企業活動の器と街のあり方がどうあったらよいかを中心課題として求め続けられた。施主の提示した目標は、この建物が新聞社として多くの面で街へ開きまた親しまれるとしても、訪れる人びとが「自然に襟を正したくなるもの」との一言に表されていた。

この建物の事務所建築としての特徴は、四面採光と、法規上のひとつの枠（排煙区画500㎡）内での無柱空間の実現である。正確には一層おきの無柱空間であり、上下の階ではその層全体が梁として機能するよう外周と内部に筋違が配されている。これは構造家今川憲英氏の構想に負っている（235頁図参照）。その本体の完結性を保つため、縦動線とサービス諸室を納めたシャフトを分離配置とした。そのつなぎのスペースは正面に赤城の山を望み、打合せや休憩の場となっている。街との関係は遠景・近景のふたつのスケールで構成している。遠景においては事務所棟の単純対称の平面を生かした「正面性」であり、7 mの天井高の会議

室を中心に据えたスカイラインが変化を、ユニット化したカーテンウォールの深い目地処理が光と影のめりはりを担っている。近景はヒューマンスケールでの景観の展開となっている。ガラスブロックによる光壁が道に沿って低い位置での表現線をつくり、将来緑あふれる稜線となって街角の広場へと続く。その中央に浮くガスタンク製造技術を利用したコクーン（特別会議室）には、新聞社らしく世界地図が描かれている。この広場にはいずれ彫刻も置かれポケットパークらしくなるだろう。襟を正した開放感の実現には、ミラノ在住の廣瀬満明氏製作の鍛鉄のフェンスに負うところが大きい。

1～2階は市民に開かれたホールやセミナールームとなっている。それらロビー、ホワイエなどを性格づけているヒューマンタッチの素朴で力強い木彫の数々は、赤城山中で創作活動する富田文隆氏の作品である。また最近フローリングが多いホールの床仕上げを重い石とし、周囲を可動の吸音・反射板とした室内条件は、ヨーロッパの室内楽誕生時のそれと似ている。その類似性によるのか、このホールの音響の質は演奏者たちに好評のようである。

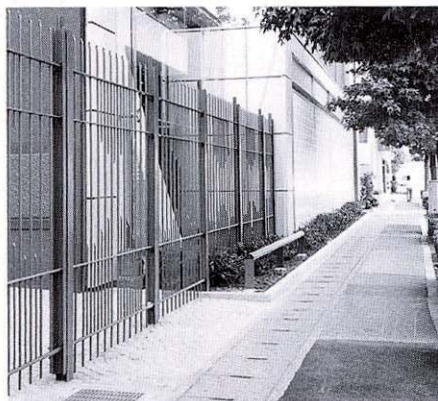
高崎支社

近代主義建築や都市の計画方法に「機能の特化」があるが、それが大きな間違いを孕んでいることは今や明らかだ。大量生産の都合である機能の純化から生じたこの考えは、建物や街をひどくつまらないものにしたばかりか、かえって融通性のないものにしてしまっている。高崎市問屋町は市の北側、環状道路沿いに位置し、問屋機能を集約した開発エリアだが、結果的には人の気配が乏しく、活気のない印象を与えている。街の主要なコーナーで市の中心に向かう通りとの交差点に敷地を得て、最初に示された施主の考えは「この街の活性化のシンボルであり、人気のないこの街で人びとが活

動するに快適な環境を示すこと」である。限られた規模でその目的に応えるため採用した方法は「人の活動が透けて見える」事務所であり、街に連続し緑化した外部空間に最大限に馴染む「木造オフィス」だった。ガラスファサードで透けたギャラリーと執務空間は殺風景な街に多少とも人びとの活動と安心感を、緑は潤いを提供する。この街の次なる展開のきっかけとなりたいと考えてのことだ。「人が歩け楽しめる街」がそれである。構造は在来構法の延長ながら、比較的大きめの短辺一スパンの繰り返しを方杖を極大化することで実現している。

街並みへ

いつの頃からか私たちの社会は街並みを美しく整えることへの興味を失ってしまっていたようだ。それは戦後の半世紀、ゼロからの再スタートと続く経済成長、都市化への対応の中で失ってしまったもののひとつだ。地価の高騰の前に建物や街並みのもつ価値創造の意味はほぼないに等しかったからだ。そうした土地本位経済が終焉した今日、自分の資産を守り、育てることが街の質を高めることではじめて可能となり、人びとの関心は自ずと街並み・景観の形成に向かうことになるだろう。生活の豊かさが建物の内側だけに留まり、街に広がった快適さ、楽しさをもてなければその満足感は小さなものに終わってしまう。そうした生活空間の向上の欲求に、新たに経済行為としての意味が加わったといえようか。本社ビルの工事を進めている頃、この街に街路灯の整備の話がもち上がった。そのデザインの相談を受け、私たちはボランティアとして協力、先頃それも完成した。街並みを整える第一歩であり、意識の広がりの証しである。そうした街づくりに加わることができたことに喜びを感じている。



道沿いの鬱囲気高める鍛鉄造のフェンス。
（写真提供：SKM設計事務所）



街に光の統一を与える街路灯。
（写真提供：上毛新聞社）